

2009年1～2月掲載分

習志野 大慈弥 爽子
頬を刺す寒風耳にうねりたる
熱爛にまずぬくもってからのこと
着膨れて弾む心を隠せざる
音のなき雨に春めく土の色
水仙に揺れてふれあふ光かな

横浜 下島 緑
二度三度羽撃ちてもとの浮寝鴨
橋の名の由来それぞれ都鳥
いっぱいにしても落葉の籠軽し
冬瓜の琥珀に葛をすこし濃く
明日からはまた積もる日々年忘

藤沢 藤田 富子
年の瀬や仲見世に絵馬掲げをり
熱爛を少し所望の旅の宿
頂きに真白なる富士冬に入る
冬紅葉由緒ある寺訪ふツアー
街道の松菰巻かれ年用意

さいたま 宮崎 美智子
淡淡し十月桜の山路ゆく
玉堂の秋一色の絵馬を掛くる
孔子廟巡れり秋の吟行に
下町の路地に吊るせる干大根
凍空や屋根に真田の六文銭

町田 小森 まさ彦
花愛でる鳥見て諷詠去年今年
初仕事初富士見ゆる古デスク
初電話変わらないかとまず問へり
俳句時間増やすと誓かふ年初め
薄氷に鯉の背びれの浮いてをり

2009年3～4月掲載分

習志野 大慈弥 爽子
下萌の色に大地のはづむ艶
日を風をのべる水面のあたたかさ
万感の光をひらく初桜
散りこめる花に深まりゆく流れ
夕されば夜の匂となる桜

横浜 下島 緑
水芹を育てて富士の水清し
白魚舟漕ぐも掬ふも海人ひとり
透けぬしが炊けば真白の白魚なる
浦町はみな軒低く目刺干す
菜の花や浦町軒を寄せて住む

藤沢 藤田 富子
学園の径の明るき芽吹きかな
浅き春流鎬馬といふ出会いあり
春立つや島おだやかに波の綺羅
石段に手摺り設けし春の宮
潮騒に掛干若布ひよろひよると

さいたま 宮崎 美智子
秩父路に落の臺買ふ一握り
うぐいすの再び来るを切に待つ
足許につむじ風立ち冴え返る
虫喰の白菜笑う程の穴
オカリナの曲に目つむる春日和

町田 小森 正彦
つむじ風生まれて校庭の春
多摩川の中洲より緑生まれ始む
裸木の色代わりいて春隣なり
猫柳怒濤の川を従へて
窓の灯の消され春夜の生まれり

2009年5～6月掲載分

習志野 大慈弥 爽子
岩肌も瀬音も風も緑なす
舟に添ひ瀬音にまぎれ夏の蝶
すきとほりゆく六月の瀬音かな
すっぽりと万緑に呑みこまれをり
十ほどは若返りたる夏帽子

横浜 下島 緑
花は葉に鳩が水飲むにはたずみ
雨雲に泰山木の花の白
藤の花揺らして午後の風すこし
ふたつめの春雷鳴らず秘めし恋
胸深く埋もれ水あり朴の花

藤沢 藤田 富子
れんげ草輪飾りにしてなつかしむ
満開の花に酔ひたる人の波
大空に香りを放つ白木蓮
海沿いを走る単線のどけしや
手すさびの仕事放りて春眠し

さいたま 宮崎 美智子
満開の花の校庭人おらず
師の墓前語り合ふ間の春日傘
野の風にまるまる太る鯉のぼり
傍に啼くうぐいすのまだ幼
花吹雪一人占めせむ子の両手

町田 小森 まさ彦
薫風や富士は日本一の山
樺太は見へず卯波の立つばかり
切れ上がる小股小股や神田祭
裏年に当たる今年の柿若葉
丸の内の常磐木落葉の吹きだまり

2009年7～8月掲載分

習志野 大慈弥 爽子
灯を消してより闇涼し星涼し
万緑の底よりにじみくる暑さ
しずみゆく日を蛸の聲が追う
涼しさを活けるお流儀知らずとも
行く水に灯影のゆらぐ夜の秋

横浜 下島 緑
校庭に終業の鐘ひつじ草
河骨や水深ければ花沈み
青梅雨や勾配ゆるき石畳
せせらぎにかこまれてをり螢の夜
七月の木洩れ日の斑の濃く散れる

藤沢 藤田 富子
眼を病みてしばし苦痛の梅雨じめり
終日を病院めぐり梅雨晴間
雨音に今日は怠けて大朝寝
老鶯の鳴く音ききつつ厨ごと
地下街の格安サービス夏帽子

さいたま 宮崎 美智子
京風に筍飯をうす味に
桜桃忌いつもながらの雨であり
うす紙のような芍薬花片かな
梅雨最中すつく立てる紅あざみ
夏まつりわれも江戸っ子豆しぼり

町田 小森 まさ彦
朝取りが並ぶ食卓に帰省せり
蔓影のとり忘れて大胡瓜
木下闇の透けてはるけし富士の山
蝮でて校地清掃終了す
尻の泡深くもぐりて源五郎

2009年9～10月掲載分

- 習志野 大慈弥 爽子
遠山の白く林檎の赤くなる
しなやかにほどけ光となる芒
ちりぢりに人散り散りに秋の声
夜々の雨居待寝待の月を籠め
うすき日を寄せて岸辺の秋深む
- 横浜 下島 緑
咲き続くダリアの花にやや倦みし
秋すでに生まれてをりぬ空の奥
露地昏れて白粉花の夜を匂ふ
秋刀魚網揚りて零る海の色
戯れに引けば遠くで鳴る鳴子
- 藤沢 藤田 富子
久々のビール胃の腑にこたえけり
新涼の夢かうつつか心地良く
盆灯笼鬼籍に入りし友偲ぶ
年毎の廻り灯笼色あせて
サーフィンの若さぶつける波頭
- さいたま 宮崎 美智子
黒雲を抜け夕立に叩かるる
盆供養秩父音頭の振りのよさ
鈴虫の家族の端に声を上ぐ
白き椅子避暑地の庭に人を待つ
浅間嶺にかかる夏霧早失せぬ
- 町田 小森 まさ彦
幹叩く音のみ聞こゆ秋の森
鮭上る今を限りという一途
吹き下ろす風を真っ赤に林檎園
上り詰めて小さき畑の蕎麦の花
猪垣の守りの中の野菜たち

2009年11～12月掲載分

- 習志野 大慈弥 爽子
尖りつつ乾く十一月の風
日のぬくみ吸うて枯れゆく蓮かな
風を梳き星をこぼせる枯木立
極月の人の流れにさからわず
行年の祈りの経木流しかな
- 横浜 下島 緑
月代のはや満月の形なる
温泉の町の暮れ満月の町となる
深更にして満月の空となる
山裾に住めば親しき落葉雨
このごろの甲斐なき仕事落葉掃
- 藤沢 藤田 富子
鎌倉の老樹黄葉の日に映えて
稜線を際立たせをり山静か
つるべ落とし秋の夕べの淋しとも
菊日和友の上梓を祝ひけり
豊の秋黄金に光る穂波かな
- さいたま 宮崎 美智子
狼の岩間に伏すをしかと見る
史に残る囚人道路冷まじや
紅葉する名を持つ岩を右左
下戸の我注がるる熱き甲羅酒
- 町田 小森 まさ彦
日比谷森の一木に色薄紅葉
喧噪を絶って日比谷の紅葉かな
人波に流れて終へしーの酉
西の市の縁起熊手も銀座線
雲の日の消えゆく時間暮の秋